

修学旅行と歴史学習

竹内 秀一

はじめに

高等学校で実施される行事のうち、事前・事後の指導を含めて多くの時間を費やし、さらにもっとも多額の費用を要するものが修学旅行である。

現行の高等学校学習指導要領（平成二十一年三月告示）では、修学旅行は「第5章 特別活動」のうちの〔学校行事〕で「旅行・集団宿泊的行事」として位置づけられている。そこでは「平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむ」ことが行事の内容として示されていて、その「指導計画の作成と内容の取扱い」で「年間指導計画の作成に当たっては、」各教科・科目や総合的な学習の時間などの指導との関連を図る」ように配慮することが求められている。

歴史学習においては、学習効果を高めるうえで、史跡や文化

財などの文化遺産を実際に見学することが重要であるのは当然のことで、学習指導要領にも、学習方法に「地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れる」⁽¹⁾工夫の必要性が示されている。

冒頭で述べたように、多くの時間と費用とを要する修学旅行は、それに見合う教育効果をあげることが期待されている。また、歴史学習の面からみれば、修学旅行は、旅行先で日常することのできない文化遺産に触れることで「知識・理解の一層の定着を図ったり」「歴史の考察を深めさせたりすることができ」⁽²⁾貴重な機会である。実際、二〇一〇年度に実施された全国の高校における修学旅行の内容では歴史学習（史跡・産業遺産・博物館の見学等）にもっとも重点が置かれていて（三七・三パーセント）、次が平和学習（一八・六パーセント）となっている（いずれも公益財団法人日本修学旅行協会による）。

では、実際に修学旅行は、歴史学習との関連で期待される学習効果をあげているのだろうか。こうした観点から、現在、都立高校で実施されている修学旅行を考えてみたい。

一 都立高校における修学旅行の実際

都立高校の修学旅行については、国内で実施する場合、全行程九六時間以内、すべての経費は七万六〇〇〇円以内（税別）

という制約が設けられている。この制約のもとで、現在、実施されている修学旅行は、おおよそ次の三つのタイプに分類できる。①京都・奈良を拠点に班別自主行動を大幅に取り入れた人たち（大阪や神戸までを行動範囲に含めたり、広島での平和学習を組み合わせることもある）、②沖縄や北海道など生徒に人気の高い方面で平和学習や自然体験活動を中心に班別やコース別行動などを組み合わせたかたち（長崎での平和学習および班別自主行動と、九州各地での自然体験活動などを組み合わせた形態も微増傾向にある）、③海外での語学研修や学校間交流を主とするかたち（この場合、東京都では経費を税別合計一〇万円以内と定めている）である。このうち①は伝統校や進学校に多く、②は中堅校で圧倒的な支持を得て実施されている。③は東京都では特別な理由のある場合のみに認められる修学旅行で、実施している学校はそれほど多くない。さらに、農家などに班単位で宿泊する民泊も特別な場合を除き実施は難しい。なお、修学旅行は、第二学年の九月以降に実施しなければならないという制約もある。次に①、②について事例をあげてみよう。

①京都・奈良を拠点とした修学旅行の事例 創立一〇〇年を超えるある進学校では、伝統的に京都を拠点とする修学旅行が実施されている。ある年度に行われた実際のスケジュールを次に示す。

第一日目	京都駅（一一時一五分）↓班別自主行動↓宿舎（一七時～一七時三〇分）
第二日目	宿舎（八時～八時三〇分）↓テーマ別行動↓宿舎（一七時～一七時四〇分）
第三日目	宿舎（七時四五分～八時一五分）↓班別自主行動↓宿舎（一六時二〇分～一七時三〇分）
第四日目	宿舎（七時四五分～八時三〇分）↓クラス別行動↓京都駅（一五時一五分）

宿舎は三泊とも京都の同じ宿舎である。第一・第三日目の班別自主行動は、班ごとにテーマを設けてコースを作成させ、旅行担当の教員によるチェックを受けて決定する。テーマには「稲荷を極める」「秀吉ゆかりの地を訪ねて五兆里」「歌詠みツアー」などなかなかユニークなものがある。見学地は京都・奈良を中心に大阪や神戸、もつとも遠くでは姫路城まで行っている。テーマ別行動では、あらかじめ旅行委員が作成した一一のコース（庭園・大覚寺・大徳寺・妙心寺・竜安寺など）「茶の道」高山寺・大徳寺瑞鳳院・宇治・一休寺など」「オカルト・化野念仏寺・清明神社・貴船神社・六道珍皇寺など」などを個人単位で選び、クラスを超えたグループを編成して行動する

第3日目（半日）首里城正殿、国際通り

（験）

この行程では、平和学習も十分とはいえず、琉球王国関連は首里城正殿だけという、歴史学習の観点からは何とももったいない修学旅行になってしまう。航空運賃が比較的安くなる一月・二月の実施で、もう一日行程を増やし、平和学習のコースを充実させたり琉球王国関連の史跡見学を組み込むなどして日本史の授業との関わりを強めることが望ましい。平和学習であれば、沖縄県平和祈念資料館や対馬丸記念館はもとより、ひめゆり学徒最期の地である荒崎海岸など沖縄戦を身近に感じることものできる戦跡をめぐりたい。また、歴史学習であれば県立博物館はぜひ見学しておきたいし、世界遺産に登録された今帰仁や座喜味などのグスク群、第二尚氏の玉陵など、少なくとも教科書で学ぶ歴史と関連した琉球・沖縄に関する文化遺産は、コースの中に盛り込んでおきたい。

沖縄は、都立高校の修学旅行ではもともと人気の高い旅行先である。それは、沖縄であれば生徒は満足するし、何よりも行程のバターンがある程度固まっています、教員がそれほど手間をかけなくても、ガン体験など沖縄戦を体験できる生々しい戦跡を通してそれなりの教育効果が得られるからである。しかし、

往々にして自然体験などは旅行社や現地のエージェント任せになり、平和学習はその付け足しのようになってしまふことが多い（二泊三日ではなおさらである）。それを避けるためにも、生徒たちを琉球・沖縄の独自の歴史や文化にもっと触れさせるためにも、教員の側のより主体的な関わりが必要とされる。

二 修学旅行の新たな素材

①産業遺産の見学や「街道観光」で文化遺産に触れる 近年注目されているのが近代の産業遺産である。また、主として近世の街道を舞台に、関連する史跡や人々の営みに触れる「街道観光」も提唱されている^③。

工業高校では、修学旅行の行程に工場見学を組み込むところがあるが、たとえば北部九州地方で実施する場合、現に稼働している工場の見学以外に、北九州市の八幡製鉄所東田第一高炉を見学するという例もあった。また、長崎での平和学習に加え、^{はしま}端島（通称軍艦島、かつての海底炭鉱の跡）まで足を延ばすというプランも検討されている。産業遺産は、所在地が散らばっていたり不便であったり、またそれ自体が地味であるため修学旅行の見学地としてはどうかという懸念もある。しかし、日本の近代化・工業化の歩みを物語る貴重な文化遺産であり、明確なねらいをもった事前学習をしっかりと行えば、それらに実際

に触れる歴史学習上の効果は大きい。

また「街道観光」も、沿道の文化の集積ともいえる倉敷や尾道・会津若松などは、史跡や街並みを見学するだけでなく、それら地域の人々との交流を通して地域の生活文化に直接触れることのできる班別自主行動の適地であり、これからの修学旅行の新たな形態として考えていくべきであろう。

② 農山漁村生活体験で生活文化に触れる 二〇一三年八月に開催された公益財団法人日本修学旅行協会主催の第九回教育旅行シンポジウムでは、「教育旅行をめぐるニューツーリズムの現状と課題」がメインテーマとされていた。農山漁村での生活体験を含む旅行形態はグリーンツーリズム、ブルーツーリズムなどとよばれているが、総務省・文科省・農水省連携による「子ども農山漁村交流プロジェクト」が進められている小学校に比べて、高校教員の認知度は高いとはいえない。⁽⁴⁾また、農山漁村での生活体験といえは農家などに宿泊して、その家の人たちと何日間か生活を共にすることがもつとも効果が大きいのであるが、都立高校の場合、様々な制約があつて民泊を実施することは難しい。そのため、こうしたかたちで修学旅行を実施している学校はきわめて少ないのが現状である。

しかし、主として近世以降、連続と繰返されてきた人々の生活の、その一端でも身をもつて体験することは、とくに都会で

暮らす都立高校生にとつては意味が大きい。近世史では、「農山漁村における生活や文化」（学習指導要領）第2章第2節（地理歴史第4日本史B）を学習することになるが、その際には、その内容をより現実味をもつてとらえることができるに違いない。実施にあたっては工夫しなければならない点が多いが、体験活動を重視する現行の学習指導要領が実施されたことも踏まえ、今後、修学旅行の新しいかたちとして検討していく価値があるだろう。

おわりに

都立高校の修学旅行は、学年主導で旅行先が決まることが多い。その場合、次年度の一学年担任団が決まる二月中旬から検討が始まる。これは、航空機を利用するのであれば、早いうちに旅行先を決め旅行社を選定しておく必要があるからである。学年団に地歴科の教員がいる場合には、その企画・運営の中心となることが予想される。修学旅行に学校としての一定の方向性がなければ、比較的自由に考えることができるのであるが、やはり、教員の側の負担量や生徒の意向（まだ新入生は入学以前なのだが）を優先して、旅行先やそこでの行程を決めてしまう傾向がある。都立高校で沖縄が一番人気なのは、ここにも要因がある。しかし、はじめに述べたように修学旅行はきわめて

効果の高い歴史学習のチャンスなのである。地歴科担当の教員であれば、ぜひこれをものにした。

最近、中高一貫校として完成した都立の中等教育学校（六年制）では、校外学習や遠足、修学旅行全体を「教育旅行」として位置づけ、一年生（中学一年生にあたる）で近隣地域でのフィールドワーク、三年生の春に「江戸・東京」をテーマとした班別自主行動による遠足、秋に奈良・京都への修学旅行、四年生で鎌倉への遠足、そして五年生の秋にマレーシアへの修学旅行という体系だったプログラムを組んでいる。そのねらいは、「現在の文化財から歴史認識を育てる」ことである⁽⁵⁾。当然のことながら、これには相当の時間をかけた事前・事後の学習が伴っているし、通常の歴史・地理の学習との連携も図られている。生徒の成長の過程を踏まえつつ、身近な場所から海外へと、教育旅行を通して生徒たちの視野を広げながら、生徒のグローバルな歴史認識を育てていこうという取組である。

修学旅行を単なる「想い出作り」といった一過性の行事で終わらせないためには、たとえ六年制でなくとも、このような学年代階に応じた、学校としての意図的・計画的、そして組織的な教育旅行（修学旅行）の企画・実施が必要とされるのである。そしてこの取組には、何よりも地歴科教員の積極的・主体的な関与が望まれるのである。

註

(1) 『高等学校学習指導要領』第2章第2節地理歴史第3日本史A 3内容の取扱い(1)のウ、第4日本史B 3内容の取扱い(1)のウ

(2) 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』七七頁

(3) 須田寛「私の街道観光論」1-3「教育旅行」No.684・No.685・No.687、公益財団法人日本修学旅行協会、二〇一三年

(4) 「特集 第九回教育旅行シンポジウム「教育旅行をめぐるニューツーリズムの現状と課題」」『教育旅行』No.690、公益財団法人日本修学旅行協会、二〇一三年

(5) 仙田直人「ローカルからグローバルな視点まで育てる幅広い教育旅行の実践」『教育旅行』No.692、公益財団法人日本修学旅行協会、二〇一四年

（たけうち・しゅういち

／前東京都公立高等学校長協会修学旅行実行委員会専門委員）